

校舎の中で遊んでいると二人きりの花火をあげている二人の男女がいた。私から見ていると、先生としての立場を振りかざすのが目的なので、特に声をかけるようなことはしない。そしてその二人もそんな私を見て、何もしないことを知っているから特に苦笑いをして会釈する程度で私をすぐに忘れた。きつとそれが最期の景色を見ている私なんだろう。恐らくは誰も知らないことであり、そんな景色を見ても何も感じないから、私が知っていることをすぐに景色の中に比べてしまうのはいつものことなのかもしれない。

そんなことをどうでもいい、と思いつながら、くだらないことを考えている自分に呆れを覚えたのはあながち間違えてないのだろう。それほど、私は疲れているのだろうか。そして、窓ガラスに雲掛かった、針、と軋んだ寒さに私は震えていた。きつと何も知らないのは私だけなんだろうと思うから。私が知っているのはすぐに忘れてしまう思い出と、それだけ大変なんだと思ってしまう心をどこか遠い地平線に見つめている少年の姿になっているからだ。時々思い出すが、一夏の思い出を私は今でも覚えている。一人が嫌なんかじゃなくて、独りを嫌だと言っているようなものなのかもしれない。一つのことを追いかけているうちに何も覚えていないのは私だけなのかもしれない。……。

いったい何を考えているのだろう。私はよくこんな風に自分の意思と関係なく過去を振り返ることが多々ある。そんなに暇人なのかと言われたらそれまでだが、それでも少しは知っている部分もあるから——何が？ 自分の中にいるもう一つの自己の存在に、問いかけてしまう。

「こうなってしまった状況に赦しを降したのは誰ですか？」

声に出してしまった。呆れてしまい、それに、自分の心が疲れていることを放棄してしまった身体をいつまでもここに置きたくない。それがたとえ私の運命を決めようとしても、いつの間にか自分の心を教えてくれている。嬉しいのか、泣きたいのか、今でもわからないと心は叫んでいる。何も知らない。思い出の中にいる少年の姿を追いかけていると、自分を知っているのがいつでも知っていることなんだと、よくわからないことを考えているのがどこまでも広がる脳内スクリーンに映りこむ。思い出という心に叫び声をあげているのは誰でもない私なんだからと。

知っているのが自分なんだと。知らないことが他人なんだと。どこまでもひろがる。言葉に変えることが難しくて。

涙を流してそう悟った。

黄昏時に浮かび上がる紅の空に鳥を見つめている自分の姿があまりにも哀れなのだと――。

「ひとりをつつしむ」

そんなとき、私はよく遊んでいた。時々のように思い出を振り返ることが出来なかった公園で二人きりの相談事。ブランコに滑り台。そして砂場。水道水が流れている公園隣のプールに

いつも憧憬の気持ちを持つのは子供心に嬉しかった。私はよくその男の子に相談事。

「なんで、こんなことになったんだ。そして私を知っている自分に何かをおしえてもらいたかった」

「何言っているの？」

「いや、学校で劇やることになったから、台本の練習。だから聞いてもらいたかったの。それついでに、なんで、今日、私を避けたの？」

「避けた？ いや、周りの子から一緒にいるのやめなよ、って言われてね。僕は嫌だって言ったら、次から遊んであげないからって言われてね。だから、一応今日遊ぶこと知っていたから、ついでにこつちからも聞きたかったから」

私が涙を流していたことに気付いたのか、私を良く思っていない人たちから守ってくれるのだろう。それだったら嬉しくて、つついとい約束が裏切りを見せてくれるのではないのかと思ってしまった。何がおかしいのか男の子を護っている自分に嬉しさを覚えた。

夕焼けが瞳を切り裂いた。綺麗な瞳に映りこむのは私だけの特権なんだと今でも思っている。綺麗な瞳が私だけの特権を覚えていて。輝きの中でひとりを、私は煌々と心の中が温まるように、その二つを大切にしてしまうのはどうしてだろう。

「何を？」

「決まっているじゃん。ホントに酷いことしたの？」

なんだろう。罪悪感というものを当時は知らなかったから私の言葉も理解していない人だからこそ、というか子供ながらに人生のシビアを考えているのだ、と今でも思つて笑つてしまう。「何のことはわからないけど、誰に何を？」

「良かった。そうだよ。君があんなことしないもんね」

「うーん。じゃあ誤解を解けるように説明してくれる？」

僕には誤解を解くことなんかできない……。そんなことを宣つて男の子は笑つて、答えてはくれなかった。私は何があつたのかは気にはなつたが、みんなに謝ろうと思つた。

そして、二人で遊んでいると、少しずつ暗くなつてきた公園。私は公園の中央に立っている時計台を見る。そこには私がお母さんが美味しいご飯を作つて待っている刻だつた。

「ねえ」

男の子は私に気弱い表情を向ける。浅い暗闇の中、私は男の子を見つめるけれど、それでも見てはいけないものを見たような、そんな気がしてならなかった。

「僕、明日から、あの学校からいなくなるんだ」

嫌だと素直に言えればどれだけよかつただろう。私はすぐに脆い表情で返したかつた。けど、それだけは私は許さなかつた。私の黒い感情が素直に言わさせなかつた。

「そつか。でも今の時代、いろんな手段で話せるからいいんじゃないかな」

「それでもできないから」

「とうとう？」

涙をつと、男の子は流している。公園の中で常夜灯が点される。そうして陰った男の子の影が私の瞳に映りこむ。いつものように笑っていたその顔が信じられないほど、脆く危うげなものになっていた。

「楽しかったよ……。さよなら」

涙を流しながら、男の子が言ったことを理解するまでに私はそこに立ち尽くし、理解したころには男の子の姿はなかった。

私は何をしたんだろう。そう言った思いでいっぱいだった。そしてそれが私の全てを嫌な予感を持つようになった、始まりだった。いつものように、いつものように、と。

私はただ、公園で泣いていた。もうずっと会えないのだと思ってしまったから。そしてこれからもうそうした哀しみの中で暮らしていく生活に、子供心に悔しかった。それが続くのを必死に耐えることなんて嫌だったから。私は、ただ、公園で、泣いていた。そして。

董色に染まっている空。ただ見つめているのは月の光だけ。私はいつまでそこにいたのだろう。わからないけれど、心のどこかで男の子が帰ってくることを望んでいたのかもしれない。だけど、現実是非情。私は願うだけで、神は却下するだけで。

一人で寂しく帰っていたことを今でも思い出せるのだ。

時に 涙を流す

人に 涙を流す

そして

人は 涙を流す

時は 涙を流す

学校の中でいろんな人と遊んでいることって何だろうと思ったりした。きっとこれからもそんなことを続けていくのだろうと考えていた。そして一つ思い出したことがある。それは。

「私ね、小さい頃。思い出を記憶の中に封印を施したことがあってね。それを大切に、今でも前を向いて歩いていけることがあるんだ。誰にでもそういうことってあるよね」

「何が言いたいのかさっぱりわかりません」

「加奈。そんなこと言わないで。今から最中あげるから」

「ええー。ほんとうにいい？　じゃあ今さっきのコトバ、チョーわかるう！」

「どっかに行っちゃええ！」

「をい」

とりあえず、西村加奈というわけのわからないギャルらしい人間にこんなことを言ってしまった私が馬鹿だったと後悔してしまった。ただ、気を抜く会話をしたいなと思ったら、何故か

このギャルらしい人と話したくなってしまふのが私の癖なんだと思う。いつものように、世界のことを考えている私を、今も涙を流すのは大切なんだろうと思ってしまったのだから。

校舎の中で、二人で教室の机に座って、黄昏時の陽射しを浴びながら、二人で黒板を見つめながら話す。顔をときに見合うが、何故か、お互い苦笑してしまう。何故かはわからないけれど、それでもなんだか、幸せだと思える、この瞬間をやっぱり大切にしていきたい。そんなことを思ってしまう。

それだけ、お互いを大切にしているのだろうか。それだけ、この世界について私は考えていたのだろうか。

「わからないね。ヨッシーがどんなことを考えているのかは知らないけどさ」

吉本という私の苗字を渾名にいじっていつものように私に喋ってくる。なにかのアニメのキラクターなのだろうか、加奈の指にはキーホルダーがかけられている。夕焼け空に翳す感じで少し持ち上げる。それが綺麗で私の瞳はそれが映る。いつの間にか、そして私が疲れている時に、涙を流すことを加奈に伝える。それだけで私は変われるような気がする。

なぜか、そんなことを考えてしまう。いつものように、そして何度も答えを変える。私が知っていることを加奈に教える。加奈が知っていることを私に教える。それだけは親友という肩書をお互いに持っている。それだけ、大切なんだと。しつこいながら、想ってしまうものだ。

「ねえ、ヨッシ。私、気が付いたんだけどさ」

「どしたん」

「今日、誰かに告白されたとしたら、私、ヨッシと離れないといけないのかな」

「いや、関係ないでしょ。なんで、私が離れないといけないのよ」

「だよね。でも、そんなことを考えてしまうのはなんでだと思う？」

「うーん。とりあえず、加奈が疲れているんじゃないのかなって思う」

「そうだよねえー。そうなんだよね。私は私なりの人生を歩んでいく。その中に、自分を見つけることが大事なんだって思うんだ」

「すごいこと考えているね。だけど、それはそれでいいんじゃない？ 普通に学校に行って、通って、卒業して、仕事先見つけて、働いて、定年を迎えて。そんな人生も悪くないと思うけど」

「そっか。でも私の頭の悪さじゃだめじゃん？」

「がんばれ！」

「そこはカンペ作ってあげる！ とかじゃないの？」

「そんなに後ろ向きな努力は認めん！」

「誰よ？」

「でもこんな進学校に来れているんだからそんなに落ち込むことはないんじゃない？」

「まあ、そうなんだけどね。そうだね。じゃあ、今日は帰ろっか」



「なんて不毛な会話だったなあ」と

ん？ と加奈が黒板から眼を背ける。私は何かがあったのかな、とは思ったが、加奈のことだから、すぐに解決できるだろうなと思って思う。加奈の破天荒に明るい性格ならどんなことがあっても難事を探偵よろしく、通過儀礼のように。

私は特に加奈を見ることなく、すぐにカバンを取る。そしてそのまま、加奈に手を振る。

「先に帰るね。彼氏といることを邪魔するのも悪いでしょ」

「お気持ち、アリガト」

加奈はやっぱり笑った。

私は教室のドアを開いて廊下に出る。後ろ手にドアを閉める。

「普通、か」

私が自分で言ったことを振り返る。私が何を求めて人生を歩んでいるのか。私がどういったことを考えているのかを知りたくて、世界のことを考えている。まるで、矛盾。いつものような、パラドックスを抱えて、私は渡り廊下を歩いていく。

その背中姿に誰も声をかけない。誰もいないからか、それとも、いつものように夏を過ごしていく。

「空でも見ながらお茶を飲もう」

なんとなく、私は今でも思い出の中で笑っている人を見つめてしまう。いつものように、い

つものように。私を助けてくれたのは、あの人だと知っているから。空を見つめる。そこには夕暮れ時に映る空独特の色、雀色がもう少しで消えていく。

そして太陽に沿って、光が瞬く。そこから何かが私の瞳に突き刺す。そしてイメージ化される。

そのイメージは私のもともあつたものかはわからないけれど、何故か、天使の姿が映りこんだ。ゲームなんて全然やっていないから、その天使の姿も、まるで白衣を着て、飛んでいる医者の如く。

ただ、もつと具体的に見るのなら、空の色に映されている人に羽根がついて、人の等身大の姿で、大きい鎌を持っている、どこかで見た幻想的な絵にありそうな、そんな姿だった。私が見つめているのを感じたのか、その姿がイメージの中で大きくなっていく。

天使が私を見つめる。とても綺麗な姿だった。だから想ってしまった。

「加奈と一緒に暮らせるユートピアに連れて行ってくれませんか？」

私は少しだけ、笑ってしまった。歩く足はそのまま校舎を出て行った。

少しだけ気付いた。私が世界のことを考えているのは、もしかして、私を導いてくれる在る者を探しているのかもしれないと。

「少しは世界の研究を続けているんだから。やっぱり、私は」

天使の姿が消えることはない。そして私はそれに希望を灯した。それと一緒に、加奈が黄金

の鎌を持って、その天使の隣に佇んでいる。そんなイメージが消えることはなかった。

空が澄い。もうすぐ夜の帳が落ちる。私は何でもないように首を振って、すぐにそのイメージを絵に描こう。

そう思ったのだ。

時に 人を見つめている

時は 人を見つめているから

神も

人に 時が見つめているから

人は 時を見つめているから

寝ていた。時々、夢から覚めたような、そんな感覚。いつしか知ってしまった、絶望の中にあった、一つの希望。私の心を占めていた、人の欠片。いつまでも傍にいてほしい、そんな私のことを覚えている人はいるのだろうか。そんなことを終わってしまったことと考えているのはなぜだろう。終わりにたくないのに。

部屋の中で焚いている蠟燭の火がふつと風に吹かれ消えた。陽炎が見えた。そして夜空を見上げた。

いつの間に夜になっていたのだろう。まだ消えゆく光を追っている鳥の姿が見つかる。私は何をしたかったのだろうと、自分に言い聞かせるのが私だけのことを知っている。今という時の中で私は何を求めているのだろう。知っていることから導くことが出来ないでいる自分が悔しい。どうして私は。

だけど、夜空を眺めていると、そんな感傷めいた言葉もいつの間にか月の中に隠れている一人の少年の姿が癒してくれる。私を慰めてくれる。

嬉しくて、嬉しいのかな。

怒りたくなくて、怒りたいのかな。

まだわからない感情の居場所を探しているのだろうから、それでもいいやと、思う自分もある。それが私なのだろうと。

思案事を知っているのが私なんだろうと思ってしまうのだから、相変わらず、知らないのは私だけだということに恥ずかしさを覚えることもやはりあるのだろう。きつと、きつと。

鳥の鳴き声が聞こえる。いつも鳴いている、そんな風に私はできるのだろうか。私を教えてくれるのは誰なのだろうか、と。あの時、この時。知っているのはそれだけなのだろうかと知っている。きつと、きつと。

喜んで鳴いているのは鳥だけではなく、私なのかもしれない。だって気付いたから。

空の裏にいる天使さんにこれから旅立ちの合図を送って。にっこり笑う。嬉しいから、怒り

たいから。自分に。そして他人に。

知らないのはどこにいるの？ 知らない人はどこにいるの？ 知っている人を探しているのはいつものこと。夜空に舞うのは一人の影。一つの影。個物の影。知らず知らずに。

私は夜空から視線を外す。見ているのは斜光に輝く机の周りに転がっている鉛筆。何も書かないけど。それでもたたくさんのことを知ってもらいたいから。そして幾多の紙。何枚もあるのは気のせいではない。綺麗なことを書いていきたいとたくさん用意した。椅子が回る。くるくる私は回って部屋を見渡す。

クローゼット、ベッド、紺色の空。一つ、二つ、三つ。

この世界に何を残せばいいの？

そんな疑問がつと頭に残るが、私は特に気にすることもなく、そのまま、夜空をまた見上げる。椅子が回っているのが楽しくて。

こんな夜中に誰も話すことはないのだと、気が付いたから。友達のことを考えても仕方ないだけ。

一つの疑問が繰り返されてた幾星霜の言葉だらけのことを教えてほしいと。一介の女性がわかって良いものはわからない。ただ、こうしてのんびりと時間を過ごすのもまたそれはそれで楽しい。嬉しいってこういうことを言うのだろうか。

何もない。日常がただ進んでいる。加奈と遊んだ記憶はいつだったか。どうしてか、そんな

ことを考えてしまう。教えられたのは自分だけの世界のこと。面白いことをしてみようとも思ったりする。ただ、楽しいことなのかともわからないけれど。

「もういいや。今日は寝よう」

考えるだけのことを知っているのなら、思うだけのことも知っている。教えてほしいのは、遠い昔にいた男の子を誰が連れ去ったのか。でも。

私の意識は微睡みの中に消えていく。ただ、寝ているだけの間に一つのことを教えてくれた、あの天使の絵が頭から焼き付き離れないのは今でも当たり前のこととなっている。それが、嬉しいのか、やはり、怒りたいのか。

わからない、わからない、と心に言い聞かせる。そしてこれからも一緒に。  
を想っているのか。

その言葉だけが何もわからない。だけど。

それを知りうな人生を歩いていくんだと、何故かそう想ってしまった。

天使と悪魔

人と神

人外の者を知る者よ

亜種を求め

異種を捨てる

ヨツシが最近おかしい。

あたいのことを知っているのはヨツシぐらい。あたいのことを知っている。それが嬉しいから友達を続けている。でもそれで友達じゃなかったら何だろうと考えちゃう。

「バスの中でも、気持ち悪い人がいるねえ」

あたいの背後に立って誰かがそんなことを言う。振り返れば、そこに一人の少年が立っている。

「どうしたん、坊や」

「ん？ お姉さん、香水がキツイよ。どんな香りかは知らないけど」

「ローズマリー。違ったっけ」

「うん、それでいいんだけど。とりあえず、僕のことを覚えている？」

「はっ？」

バスの中であたいは立ち尽くす。外の町中を流れていく景色を見ていたかったが、少年がそれを邪魔することに不機嫌さが増す。あたいのことを知っているのは学校の生徒とセンコウぐらいだろう。でも生徒という言葉がどうしてか浮かんだ。あたいは、無視することに決めた。

「そっか、無視するんだ。でもいいよ。どっちにしろ、運命の歯車は回り始めたから」

何が言いたいかね。あたいは胸中思う。そしてその少年は次の停留所に降りて行った。考えを戻す。ヨツシが最近おかしい。

何を考えているのかは出会った当初からわからなかったけど、いつも笑ってばかり。だから友達を続けているんだろう、と自分に言い聞かせる。あたいは教えてもらったときに性格の良さを知った。それだけ、楽しそうに将来を語ってくれたからあたいは嬉しかった。時々見せてくれた、はにかんだ笑顔が好きだ。

今でも思い出す。あたいが好きなのはその笑顔なんだと、何度も思ったものだ。

「なんで、あんなことになったんだろ」

ヨツシが、気付いたら目の前から消えたらどうしようと。思ってしまったものは仕方がない。ただ。

どうしてもやらないことがある。

それは。

「あたいが、この世界の人じゃないことを言ってしまったら、ヨツシ、怒るかな」

それだけが、怖いんだ。

バスは過ぎていく。町並みが少しずつ田舎に変わっていく。森が多くなり、林道の道がいくつもあるのは、どこか異界の入り口のように見えているのはきつと気のせいじゃないのだ。

神たちはあたいに期待をしている。きつとあたいのことを今でも待っている人もいる、と。



笑っているだけで、どうしてこんなにつらいのだろう。わからないけれど、ヨツシを裏切る形となってしまうかもしれない。でも、それでもあたいが目指す境地にヨツシはいらない。ずっと一人で孤独に。あたいはヨツシを使って幸せをつかみたい。

たとえ、それがデイストピアの夢だとしても。

でも、今は。今だけは。

「ヨツシと遊びたい。ただそれだけ」

望みを叶えたくて

望郷の想いを果たしたくて

泣きたいときに

望みを叶え

故郷に想いを捧げる

今日の想いを日記帳に書く。何をしてもいないのだけれど、いつものように遊んでいたのは何ら変わりようのないものなのかもしれない。独り寂しく帰り道を歩いた。そしてこんなにも大切な出来事があるだなんて。

「一緒に遊んでくれたあの人は、今どこにいるのかな」

加奈が最近、私に少しだけ冷めているような気がする。だけど、前にもそんなことは何度かあった。だからあまり気にはしていないのだけど。少し、私のことを教えてほしかった。

校舎の中で過ごす夜も悪くない。私は何を以てここにいるのかなど。いつものように遊んでいたかったのは当たり前な生活のためなのかもしれない。いずれにしろ、ここで私は今日を過ごすのは変わらないのだ。

家の中にいたら親がうるさい。一人で過ごしたいときはこうして校舎の中でよく、過ごしていた。今でもそれは変わらない。

少しだけ、寂しいと感じるけれど。私の心はいつも明るい。

「だって、加奈がいるから。だれにでも呟く必要なんてないんだけどね」

そこに加奈が彼氏と一緒に遊んでいる光景が現れた錯覚を覚えた。いつものように遊んでいる二人の幸せ。私は加奈の為に何ができるのだろうと考えてしまうけれど。それでも、それだけ大切なんだと、私は友達を大切にしているのだと、そんなことを思ってしまう。

いつも、私は加奈とおしゃべりしてしまう。学校の中で朝も昼も夕も。ここがどこか別世界なんではないかと思ってしまうぐらいに本来の学校という認識が壊れるほどに。話すことが楽しくて。この刻が永遠に続けばいいのにと何度も思った。

そしてそれが少しずつ現実になっていく、そんな不思議な感覚が身体の中に刻まれだしているのは最近になって気付いたことだ。私のことを知っている、友達もいるけれど、私の心を捕

まえているのは加奈だけ。それがやっぱり何度考えても嬉しいのだ。

少しずつ校舎に光射する淡いもの。逢魔時の日刻に近づいている。廊下に立って空を見上げれば。

紅い空に架かる雲々に虹が掛かって、辺りを彩りを飾る。綺麗な光はグラウンドを輝かせる。その照り返しで校舎が橙に染まりゆく――。

一人で見つめた景色を脳内の中に刻み込む。それが最期の意識だった頃に、私はどこにいたのだろう。私の心を捕まえてくれたのは誰だったかなと思いついていたあの頃。私は今も男の子の影を追いかけているのだろうか。私を知っているのは加奈だけ。そして幼少期の私を知っているのはあの男の子だけ。

校舎の中には先生ぐらいだろうか。私は廊下を静かに歩く、それを咎められないように。

私の心に何かが生えた。

「なんだろう、この気持ち……」

私は何もしてないけれど、いつものように涙を流していたのが、どうしてか、今は止まらない。そして答えを追い求めるかのように頭は何かを考えている。なんだろう、なんだろう。

廊下に水が流れている。特に色はないが、私の心を反射させて、姿を見つけさせる。綺麗な姿を私は見ていた。綺麗な姿が私を見ていた。鏡のような、それとも、湖のような。よくわからない心がいっつもここで、楽しんでいたと、心の中で爆ぜる。

想いが重なる。人はどうしてこんなことをしてしまっているのか、わからないと。そこにいる私も笑っている。私はいつものように、遊んでいる。校舎の中で自由に動き回っている。楽しく楽しく。哀しく悲しく、悲哀に。

そして水の量が増えていく。嵩を見ていると、ここに湖でも作るのかと。……。

「ん？」

私は気付く。ここから少しだけまっすぐ行つたところに視聴覚室がある。そこに一人の影がよぎる。

「誰だろう。先生かな、それか警備員さんか。でも、どうしてこんなところに水が垂れ流されているんだろう」

私は不思議がりながらも、視聴覚室まで行きたかったが、今は非常に疲れている。

「今は、戻ろう。身体を休めない」と

私は自分の教室の中に野外キットを置いてあるから、そこまで戻ることにする。

水の増える量は段々と。ただ、私の想いも段々と。おもしろおかしく。少しずつ未来も見え始める。

「何かが始まっている？ それとも、私が信じていた、あの出来事？」

あの出来事は、もう忘れ去られたのに。だけど、一枚の写真が心に残っている。一人で幸せそうに映っている、あいつの顔。

「拓。霧島拓。あいつ、今、どこにいるんだろう」

あいつと関わった頃にはちやめちやに楽しんで、そして別れ際の時に一枚の写真を私に渡してくれた。そしてその顔が頭の中で明滅する。もしかして。

「拓が、帰ってくるのかな」

ふと、そんなことを思ってしまった。私はここで、拓を待っているわけじゃないけど。それでも。

「好きだった気持ちは変わらないのかな。その感情も忘れたのに。どうして、今になって？」  
私は廊下を歩く。そして教室の中に入って、そのことを考えながら、窓際の椅子に座って、空をまた、見上げた。

一人を懐かしんで

笑ってもいいんだよと

涙を見せることなんて

それが嬉しいから

一人を懐かしむ

家に帰って、ご飯を食べている私がいた。綺麗な姿で何もできないだけの生活からようやく

脱出できたのは今でも楽しい思い出となっている。嬉しくて嬉しくて一人暮らしの淋しさを感じていた。

何もしないでご飯を食べているのは何のことかはわからない。きっと無駄な時間が過ぎていくのだろう、とそんなことに気が付いて、外を見る。

まだ、董色の色にはなっていない。綺麗な色合いが流れている感じで、鳥は飛んでいく。美しい姿を見せて黄金色に染まってゆく。私の心は未だ部屋の中。嫌いなことなんてない。大好きな世界のことを考えているのが今でも嬉しくて。そして悲しんで。私はクローゼットを見遣って、いつものように、涙を流す。

誰のためでもない。自分のためでもない。それこそ、意味のない涙。桜色の季節に映した光景を写真に写したのが嬉しかったのに。

「はあ、この炒飯がなんであの世界ではないのだろう」

くだらない。実に。ホントにくだらないことを今でも失ってしまったのだろうか。だけど、それでいい。いつものように過ごせば、また未来が当たり前かのように到来してくると思うから。何をしても意味のないことだと気づいたのは今か、昔か。時の中で人は何を考えているのかわからない。そして何度も変わらない答えを知っているのが今でも主観的に気付くのが遅くて。

私のことなんて知っている人がどこにいるのか、加奈だけだろうか。今の私に何をすればいい

いのかかわからない。

そんなことを食べながら考えていると、ふと気づく。

「あれ？ 外の景色が明滅している……。何かあったのかな」

ご飯をよそって、そのまま椅子に座る。綺麗な扉に映っている誰かの姿に不気味さを感じる。美しい姿とは程遠い、まるで骸骨のような不気味さを誘っている、そんな印象が私の意味不明な感じ方だった。

綺麗な。華麗な。そして麗しく。そんな風に考えたことなんて、女のくせにわからなかった。きつと今でもそんなことを感じてしまうのが私だけの特権なんだろうか。

そんなことをよそに空が董色から徐々に橙色に輝いていく。まるで時が逆行しているかのよう、空の色が変わっていく。綺麗な色のバラエティが私には美しく感じて、私は嬉しくなつて、やっぱり悲しくなる。悲哀の感情を感じるのはなぜだろうと、思い出に耽っているのが私の心に残っていた。それを掬う。

一緒に考えていたのが隣の住民の人と同じだったらしい。ベランダから出てきて、何かを大声で言っていた。私は何も知らなかったと大声で叫んでいる。何かが変わっている、そんな気がしてきた。

砂漠のイメージがなぜか浮かぶ。そこに大量の雨が降る。そして夏日に美しい世界を。世界を？

「世界が変わった？」

何のことだろう。なんでこんなイメージが湧くのだろう。そして何が私を追い詰めているのだろう。わからない。わからないけれど、綺麗な星空が見えなくなつて、もう数刻経つたのだろう。姿に見惚れていると、私はふと頭によぎる。

——加奈。

加奈のことを今でも知っているのが嬉しくて。加奈のことを忘れたことが哀しくて。今でも思ってしまうのは自分で、昔から想っていたのに加奈のことを。いつものように姿をバラバラにして、剣を持つイメージ。

「嬉しくて、何をしているのかと。今の私には何もわからない。だけど」

隣の住人さんが何か言っているが私は特に気にすることなく、ご飯を食べ始める。楽しいことを思い出すのもまたいいのかな。

何も知らずに世界のことを教えてほしくて、一人でせつかくのこの空間にいる何かを追い出さないといけないのだと、すぐに気付くのだ。私は何も知らないでいいと。何かを教えてほしくなつて、それがまた、私らしくて、すぐに。それでも

「世界が変わるのなら、私はまた、あの人と過ぐすのが楽しいのだろうと思う。だけど、加奈と一緒にいたいと思う心もまだあるのです。世界は私を見つめていますか？ 時はこれから私を無視しますか？ 一人で過ぐしたこの時をあなたは知らないのでしょうか？ だからその剣を



私の心に突き刺すのが今は正解かもしれませんね。そして何度も思った答えを今ここではつきりさせてくださいよ」

何を言っているのだろう。何を叫んでいるのだろう。何を思いの丈にしているのだろう。だけれど続く言葉は止まらない。

「世界の中で私の必要最低限を存在意義としていますか？　なにも出来ない世界のことを私が喜ぶと思いましたか？　だけど。だけど。喜ぶとしたら、加奈がいてくれたら、喜びますよ」あれ？　涙を流している。私、涙を流している。そして。

草原が見渡せる、小屋の中に私はいた。